第29回例会報告

第一部:基調講演

日本古典と感染症

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館 館長　ロバート キャンベル氏

国文学研究資料館では、「古典籍」と呼ばれる明治より前に作られた日本の文献資料を多く保存しています。この古典籍と感染症との関わりについて見ていくと、SNSやアプリなどなかった江戸の都市民にとって、情報伝達・共有のための唯一の手段が書物であったと分かります。

天保の大飢饉下にあった1830年前半の書物『豊年教種（ほうねんおしえぐさ）』では、飢えをしのぐためにどういった植物をどう処理して食べるのかなど、実用的な情報が植物画とともに書かれています。また、1803年の小説『麻疹戯言（ましんぎげん）』では、江戸の商売人たちが麻疹流行で苦しむ様子がコミカルに描写されています。今の私たちと似た状況ですが、このユーモアの感覚は今日と異なります。

天災や感染症で社会が壁にぶつかった時、かつての日本では書物が人々に生き抜く力を与えていました。「文学」の中には今日の私たちが忘れてしまった価値やイノベーションの種が眠っていることを知る講演となりました。

第一部:会員対談

日本古典から見た感染症のビジネスモデルへの影響

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 館長　ロバート キャンベル氏
FSX株式会社 代表取締役社長兼CEO　藤波 克之氏 ／ 有限会社エニシング 代表取締役社長　西村 和弘氏

FSX（株）が取り扱う「おしぼり」と、（有）エニシングが製作・販売する「帆前掛け」、どちらも江戸時代が起源で、日本の伝統的な歴史の上に成り立つ商品であるという話から、「もてなし」という日本文化の心について再考されました。その上で、その心をどう海外へ伝え、コロナ禍で「衛生技術」が模索される現代においてどう拡大させていくか、といったグローバルな方向へと会話が展開していきました。

おしぼり・帆前掛けのルーツから現在・未来までを縦断し、企業経営と日本文学研究という異なる立場からの感性や知識、経験が重なった、非常に価値のある対談となりました。

第二部:第17回多摩ブルー・グリーン賞最優秀賞企業2社によるプレゼンテーション

簡単で安全なロボットの実現に求められるダイレクトドライブモータ

マイクロテック・ラボラトリー株式会社
代表取締役　二関 智司氏

リアルハプティクス技術（力触覚）搭載のロボット・義手の関節部分に使用される同社の商品「ダイレクトドライブモータ」の特徴について説明され、今までロボットアームではできなかった柔らかな動きが可能になり、ロボット産業市場において導入が期待される現状が詳しく解説されました。

10年で年商30億へ拡大したビジネスモデル NetDepot

東京システム運輸ホールディングス株式会社
統括本部 課長　北川 尚信氏

小規模通販ショップ向けに展開する「専門倉庫＝ネットデポ」は、小スペースを通販用倉庫として提供するだけでなく、機材や倉庫スタッフの共有化、入出荷代行、管理システムの提供などすべてパッケージ化し、付加価値をつけて販売する仕組みです。このビジネスモデルは、EC通販の拡大とともにさらに普及する見通しについて説明されました。